

合場敬子著「女子プロレスラーの身体とジェンダー：
規範的『女らしさ』を超えて」明石書店, 2013年

**AIBA Keiko: Body of Women Professional Wrestler and Gender:
Beyond the Normative “Femininity”.
Akashi-Shoten Publishing Co.,Ltd.,2013.**

松宮 智生

Tomoki MATSUMIYA

1. 本書の概要

本書は「身体フェミニズム」、すなわち、「フェミニズムの思想に裏打ちされた、女性が身体的力を獲得することを目指す実践」(p.204)の可能性を論じた著作である。現代日本における「理想の女性身体」は、「痩せていて、脚が長く細く、胸が豊かな身体」(p.93)とされるが、この「理想の女性身体」は、女性たちに抑圧的に働いている。著者は、女性が「理想の女性身体」を作り上げることを強く奨励される一方で、自らの身体的な力や運動能力を発達させることが奨励されていないという現実を「女性のジェンダー化された身体の社会化」の問題として捉えている。この問題を考察するために、著者は女子プロレスラーの身体に着目した。その理由は、①プロレスをする身体を獲得するために、女子プロレスラーたちは、日本社会の理想の女性身体とは異なる方向、すなわち、筋肉と脂肪をつけ、身体を大きくする方向に自己の身体を変容させていること(第4章)、そして、②プロレスラーになる過程で、闘う技能(自分の身体に対する暴力に対抗するための身体的技能)

という身体的力を獲得していること(第5章)にある。本書は、女子プロレスラーたちが変容した自己の身体をどのように認識し、プロレスをすることからどのような恩恵を受けているのかを明らかにする。それらの考察から、理想の女性身体から自由ではなく、身体的力を身につけていない女性たちが、どのように理想の女性身体から自由になり、身体的力を獲得できるのかを示唆することを目的としている。

本書の構成は次のとおりである。

- 第1章 女性の身体とジェンダー
 - 第2章 女子プロレス興行の特徴と軌跡
 - 第3章 プロレスラーになる夢：オーディション合格を目指して
 - 第4章 プロレスができる身体への変容
 - 第5章 闘う技能が生み出すもの：自己防衛への応用
 - 第6章 演技としての女子プロレスとジェンダーの変容
 - 第7章 力を獲得する身体と挑戦される身体
 - 第8章 身体変容と身体フェミニズム
- 第1章では、問題の所在と研究の目的、研究方

法が述べられており、第2章と第3章では、日本における女子プロレスの歴史と現状を説明している。特に第3章では、プロレスラー志望の少女たちが、「オーディション」と呼ばれる選考に合格するまでの過程に焦点が当てられている。第4章から第7章までが本論にあたる。

第4章では、女子プロレスラーたちの身体における変容を次の2つの側面から捉える。第一に、オーディション合格後の「入団」からデビューのための「プロテスト」に合格するまでの過程で彼女たちが自らの身体にどのような変化があったと認識しているのか、第二に、彼女たちがプロレスラーの身体を獲得することによって、自らがもつ「理想の女性身体」への認識が変容するのか否かである。

同章において、ある女子プロレスラーは、理想の女性身体のあり方は「痩せた」身体だけではなく、「強くかっこいい」身体も女性として魅力的だと考えていた。支配的な価値をもつ理想の女性身体とは別の身体像を提示し、その身体に自信を持つことが可能であるとしたその視点をして、筆者は、「痩せた」女性身体の桎梏から自由になる契機としてとらえる。なぜ、それぞれの身体に自信をもつことができたのか。筆者は、「自信の源泉としての身体」の項の中で、プロレスという身体的「経験」によって「多様なもの」を獲得したことが自信の源泉になっていることを指摘する。

第5章では、女性の「身体的脆弱性」を変容させる可能性を考察する。「身体的脆弱性」とは、女性が社会化される過程で自らの身体的力を脆弱だと感じることを意味する。多くの一般女性が身体的脆弱性を身につけ、男性の暴力に対抗する心理的・身体的力を持っていないなか、女子プロレスラーたちが暴力に対してどのように対処しているのかを考察することによって、女性が男性からの暴力に対抗できる可能性を見出そうと試みる。レスラーたちのほとんどは、レスラーになる以前に身体的脆弱性を身につけていなかったため、この問いを検証することはできなかったものの、逆

に、身体的脆弱性を身につけること阻止する2つの要因をあげることができた。一つは、闘争的スポーツを含む幅広いスポーツの経験であり、もう一つは男女一緒にの体育授業での身体的自信の獲得である。さらに、闘争的スポーツあるいはそれに類似した活動は、身体的脆弱性を持つ女性や身体的自信のない女性にも、自分の身体を使って相手を攻撃する経験を通じて、男性からの暴力に対抗できるという自信を醸成する可能性を有していることも示唆している。

第6章では、女子プロレスの「演技」の側面とジェンダーによって構築されている規範的身体との関係を考察する。プロレスには、個性を目立たせたり、自分を印象づけるための「演技」が多く含まれる。そのような演技がジェンダー秩序やセックス・ジェンダー体系をどのように変容させるのか。女子プロレスに求められる個性は多様である。それらは、ジェンダー秩序、特に異性愛のジェンダー秩序と複雑な関係を持っている。かわいそうなベビー（善玉）と憎たらしいヒール（悪玉）という典型的なプロレスラーのあり方は、異性愛のジェンダー秩序を再生産するが、他の多様な個性と同一の地平に存在する一つのキャラクターの類型にすぎず、多様な女子プロレスの価値体系は、異性愛ジェンダー秩序を変容させる可能性をもつ。著者は、同時に、女子プロレスラーたちの身体は、規範的な男性身体と規範的な女性身体を別個に存在させ、両方の混在を許さないセックス・ジェンダー体系の二元的構造そのものを不安定にし、変容させているという見解を示す。

第7章では、女子プロレスラーがプロレスをすることによって浴する恩恵や挑戦、すなわち、プロレスの経験が彼女たちの日常生活に及ぼす影響について考察する。この章（ひいては本書全体）の考察の背景には、身体活動に参加していない女性たちが身体活動から得られるはずの恩恵を獲得できないままになっているかもしれない、という著者の問題意識がある。レスラーたちは、多くの女性が獲得できない身体的強さを獲得し、身体的

エンパワーメントを経験していたが、かわいい服が着られなくなったり、男性に間違えられる経験をするものもいた。著者は、これらの一見否定的な影響を「セックス・ジェンダー体系からの男らしさを示す女性に対する制裁」ととらえるが、このような制裁にも関わらず、レスラーたちは外見を変えないことによって、結果的にセックス・ジェンダー体系に対抗していると述べる。また著者は、一見ジェンダー規範に適合的に見える男女でも、実はこれらの規範を脅かす行動を取っている可能性があることも指摘する。

まとめの第8章では、女子プロレスラーの身体や演技がジェンダー規範にどのように挑戦しているのか、あるいはそれらを再生産しているのかを考察する。結論として、女子プロレスラーたちがプロレスという身体活動を通じて自らをエンパワーメントしていたことから、身体活動をしていない女性たちが身体活動を通じてどのようにエンパワーメントできるかということ「身体フェミニズム」として概念化し、その目指すべき方向を示唆する。本書の分析結果から、「身体フェミニズム」が目指すものとして、日本社会での女性の身体活動への参加の奨励とそれによる恩恵の獲得、そして、女性が自己防衛訓練に参加し、男性からの暴力に対抗できるという自信を獲得し、同時に自分の身体的強さを実感することがあげられる。

今後「身体フェミニズム」の実現に向けて必要なこととして、著者は、日本の女性がなぜ身体活動に男性と同じ程度に参加しないのか、身体活動からどのような恩恵を受けているのか、あるいは身体活動をしなかったことがどのような弊害を受けているのかを明らかにし、その知見を社会に発信していくこと、さらに、自己防衛訓練の重要性が共有され、実践されることをあげる。

2. 本書の意義・特徴

本書の特筆すべき点の一つは、「身体フェミニズム」という実践的概念を提示したことである。

「身体フェミニズム」という運動・実践がなぜ必要なのか。それは、従来のフェミニスト思想による精神的エンパワーメントだけでは身体活動からの恩恵を獲得できないし、身体活動をしなかったことによる損失を回避できないからである。他方、フェミニズムの視点のない身体的力の獲得だけでは、元来「男性文化」であったスポーツに組み込まれている「男性身体の優位性」「異性愛主義」「同性愛嫌悪」の再生産に無批判に関与してしまうおそれがある。このように、本書が提示する「身体フェミニズム」は、多くの女性たちが本来もっている身体的な力を十分に発揮できない状況を打開する手がかりになるだけではなく、スポーツにおいて、あるいはスポーツを通じてジェンダーを語ることの本質的意義をも包含している。すなわち、スポーツが女性をエンパワーする一面をもちながら、他方、スポーツそれ自体が既存のジェンダー規範を再生産・強化しているかもしれないという背反的側面があること、つまり「スポーツとジェンダー」という研究領域が存在することの意義をも改めて問い直しているのである。

特筆すべき点のもう一つは、研究対象が「女子プロレスラー」であることである。女子プロレスラーは、「身体フェミニズム」を語るための格好の素材と思われる。プロレスラーの身体のあり方は普通のアスリートとは異なる。アスリートの身体は徹底的に機能的な身体であるが、「痩せている」「脂肪が少ない」という側面で理想の女性身体と重なる部分があり、多くの女性が理想の女性身体を求めるプロセスでは、アスリートの身体がモデルとなることもあろう。ところが、女子プロレスラーは、基本的には、「大きなからだ」を目指し、規範的女性像とはまったく異なる方向に自己を変容させる。そのような女子プロレスラーの身体のあり方が「身体フェミニズム」の実践的可能性を示す一つのモデルとなり得るように思える。

また、女子プロレスラーの身体は、女性身体に向けられる「まなざし」の存在を浮かび上がらせる。プロレスは、人に「見せる」あるいは「見ら

れる」ことを前提にしたジャンルである。女子プロレスにおいては、「強さ」のみではなく、既存のジェンダー規範に合致する「かわいさ」や逆にそれに対抗するようなキャラクターなど、多様な個性が存在する。女子プロレスラーの身体は、プロレスをする機能的身体であるとともに、普通のアスリートには求められることのない、「見せる」「見られる」ことを前提にした表現性の強い身体なのである。このような女子プロレスラーを素材にして、「見られる身体」としてのジェンダー的身体を考察したことは斬新かつ有効であると考えられる。

本書の意義を現代の女性の健康とスポーツ実施状況との関係から見てみると、体育・スポーツ科学に携わる人々には周知のとおり、文部科学省の2012年度の調査では、小学生女子のうち、1週間の総運動時間が60分に満たない児童が全体の約4分の1を占めており、この値は、男子の2倍以上であった。女子は運動しなくてもよいという暗黙の社会的合意があることで、女子児童の運動機会が制限されてきたと言える。近年、その問題の重要性と深刻性がようやく認識されはじめてきたところであろう。

身体活動によって女性が浴する恩恵については、各分野において、すでに多くの先行研究が発表されている。例えば、生理学の分野では、心肺機能の向上、骨密度の増加、閉経後にリスクが高まる骨粗鬆症の予防効果などが明らかにされているし、心理学・精神医学的には、鬱や不安な精神状態になりにくいことや有能感が獲得されることも報告されている。スポーツや身体活動が女性にもたらす恩恵は多領域にわたって明らかになってきている。

本書に登場する女子プロレスラー25人の語りからも、プロレスができる身体に自信を持ち、身体的力を獲得し、身体的にエンパワーメントしていることが明らかになった。著者は、彼女たちがプロレスという身体活動で獲得した恩恵を、プロレスをしていない女性、つまり日本中のほとんど

の女性たちが共有するためにどうすれば良いのかということにまで考えを及ぼしている。そのために「身体フェミニズム」という新しい概念および運動・実践を提唱し、その必要性を説き、新しい女性の身体の可能性を導き出そうとしているのである。

3. 今後の展開に向けて

女子プロレスラーを対象にした研究から得られた知見を他の多くの女性のエンパワーにも及ぼすには、著者が第8章で述べているとおり、女性が身体活動に参加しない理由や参加から得られる恩恵などについて、他のスポーツ・身体活動における研究の蓄積が必要であろう。また、女性へのエンパワーを実証してきた先行諸研究を「身体フェミニズム」の立場から再構成することも有効であろうと考えられる。

本書は、身体の変容に伴う自己意識、さらに私生活で浴する恩恵・挑戦がテーマの中心となっている。研究対象が女子プロレスラーであることは、本書の大きな特徴であるが、反面、プロレスラーの身体は、ある種の「過剰な身体」であり、多くの女性にとっては縁遠い存在である。また、プロレスは厳密な意味ではスポーツでもなければ格闘技でもない。もちろん、「強く見せる」ために、相当程度の格闘技術を習得するであろうし、女子プロレスラーたちが現実に強いことは否定しない。彼女たちは、プロレスをする過程において「強い身体」を獲得したことで自己防衛が可能になった。しかし、必ずしも自己防衛訓練によって防衛の「技術」を身につけたわけではないかもしれない。自己防衛訓練の重要性が共有されるには、よりリアルな、あるいはより身近で実践的な「強さ」を追求する武道・格闘家を対象とした調査・研究も求められよう。

プロレスは非常にタフなパフォーマンスであり、怪我などの危険を伴い、後遺症に悩むレスラーも少なからず存在することが想像される。身

体的なダメージを負いながら、現役時代にプロレスをすることで得られた恩恵が現役引退後にも及ぶのかどうかは懸念されるところである。エンパワーとは逆に、負の側面もあわせて視野に入れておく必要があるであろう。この課題は、女子プロレスに限ったことではなく、あらゆるスポーツに関わることではあるが、大きな危険を伴うプロレスという素材を用いたことで気付かされる課題でもある。

以上、本書のレビューから、今後の研究の展開を構想してみたが、これらは、本書の課題というよりは、「スポーツとジェンダー」という領域に関わる研究者たちの課題でもあるように思える。このように見ても、本書は「スポーツとジェンダー」という領域に恩恵と（良い意味での）挑戦をもたらしている。